地学 Sheets No.7 2009.6.1 発行

テーマパネル4

浅い海から平原に

（あさ うみ へいげん）

その1
常設展示室

幻の大陸であるオホーツク古陸は，ユーラシア大陸に衝突した後，古陸の西縁に東側の沈み込み帯を形成しながら，徐々に西へ移動していきました。古陸が西へ移動することによって，その南縁には東西方向のトランスフォーム断層ができたと考えられています。また，古陸の西方には神居古潭構造帯をつくるきっかけとなった西側沈み込み帯がありましたが，これら東西の沈み込み帯と断層によって挟まれた海域は，「古オホーツク海」と呼ばれています。

旭川市の西方，神居古潭構造帯を越えたところには，古第三紀の中期始新世から前期漸新世にかけて堆積した石狩層群と幌内層群が堆積しています。石狩層群は，エゾ累層群を不整合に覆い，幌内層群は石狩層群を不整合に覆います。これらは，この時代に存在した東西島弧衝突直前の淡水成～海成の地層にあたり，砂岩とシルト岩の互層からなる他，石狩層群には炭層を挟んでいます。

北海道で産出される瀝青炭と呼ばれる石炭の層は，古第三紀の炭層が主体です。これらは北海道最大規模の埋蔵量を誇る石狩炭田や，留萌炭田・釧路炭田などに分布しています。白亜紀や新第三紀の炭層も存在しますが，小規模であり産地も少数です。どうして，この頃に炭田が発達したのでしょうか。

（地質学・岩石学担当学芸員　向井正幸）